デューイの「習慣」概念の根本的な特徴について

天　間　　環*

Study of fundamental characteristics of Dewey's Conception for the "HABITS"

Tamaki Temma

習慣的行動は、デューイの『人間性と行為』に基づいて考察するならば、次のように定義づけることができる。すなわち、習慣的行動とは、①後に獲得された人間の活動力であり、そして②習慣的行動自らの中に活動力の群小諸要素の何らかの整頓作用なり組織を含んでいるものであって、③性質上客観的・動的でいつでも顕在的な仕方で外へ現れ出ようとしているものであり、④何らかの抑圧された従属的な形をとって常時機能しているものである。

そこで、本研究は、上で述べた定義を基に、デューイの「習慣」概念の根本的な特徴を、（1）習慣的行動と「意味」との関連、（2）習慣的行動と「精神的・道徳的行為」との関連、（3）習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連から改めて捉え直し、人間行動の成り立ち方の分析的研究をさらに深めていこうとする、基礎的研究である。

キーワード：習慣、習慣的行動様式、意味、自我、知性

1．問題設定

（1）「習慣」概念に関わる研究過程

本研究は、これまで、人間形成、つまり人間における習慣形成の問題を考察する際、『人間性と行為（HUMAN NATURE AND CONDUCT)』をはじめ、デューイの著作に基づいて進めてきた。人間における習慣形成についての問題を、まず、①習慣的行動様式の形成・再形成の出発点となる、人間個体の誕生時における「未成熟」の特殊な在り方と、それが習慣的行動組織の形成において持つ固有の可能性について考察した[(1)]。次に、②人間における習慣形成の根本的な在り方を理解するために、デューイが展開した「習慣」概念の特徴を三段階に分けて検討し、個々人において形成される習慣的行動の一般的特性を明らかにすることに焦点を絞って考察した[(2)]。そして、次に、③デューイにおける哲学（的思索）にとって、人間行動の根本的な諸特徴を含んでいる習慣的行動こそが、その考察を始める出発点として極めて相応しいもの、固有の素材群を成すものであるということを、彼の思索の筋道をより一層具体化し辿りながら考察した[(3)]。さらに、④これまでの習慣的行動の問題についての考察から、人間の反省的意識の働きを生み出す母胎としての習慣的行動が、如何にして変革・再構成され次への新たな行動を生み出していくか、習慣的行動様式が変革・再構成される場合の、そのメカニ

2014年3月24日受理
*尚絅学院大学　教授

ズムについての問題を具体的に考察した[4]。

そこで、本稿では、これまでの研究を踏まえ、これまであまり明らかにされてこなかったデューイの「習慣」概念に関わる研究を一層推進するため、後述の①習慣的行動と「意味」との関連、②習慣的行動と「精神的・道徳的行為」との関連、③習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連から捉え直し、「習慣」概念の根本的特徴についての考察へと包括的・発展的に進めて行くための第一歩として、デューイの「習慣」概念の叙述を可能な限り具体的に辿って考察する。

（2）デューイにおける「習慣」論を研究することの意義

ここで、『人間性と行為』の「習慣」概念を分析する前に、伝統的な心理学や専門諸科学及び教育実践の領域の研究者は、「習慣」についてどのように理解しているかについて若干の考察を加えることは、逆向きの仕方で、デューイの新しい「習慣」概念の本質的特徴を一層際立たせることになり有意義である。

そこで、「習慣」を鍵概念とするような心理学を始め、多くの専門諸科学の分野に目を転じると、未だに、伝統的な知性、理性、または反省的意識の概念が広く支持されて通用し支配している。そこでは、人間すなわち精神的存在においては、知覚の過程を直接に創出し、それに基づいて観念を構成し、かくして世界を認識し、この認識に基づいて行動のプランを構成し、そうしたプランの下で反応＝行動を開始するのは、他でもない理性、知性、または反省的意識の働きである、と考える立場が根本的に前提されている。そして、習慣的な働き、すなわち習慣的な人間の反応＝行動は、精神的な機能や働きとは、もともと関係のないもの、身体的な反応＝行動だけに見られるものと考えられている。さらに、それは、身体の反応＝行動においても、身体の反射的な反応の硬直し孤立した断片、または、適応し損なった反応＝行動の断片と見なされ、人間行動における有意味の不可欠の構成要素としては、無視されている。そうした、理性、知性または反省的意識を研究しその上に理論構築された伝統的な認識論、行為論の下で、心理学を始め多くの専門諸科学[5]は、結局のところ、行為当事者において、理性や知性を目覚めさせ、反省的意識の働きを緊張させて集中的に発揮させることにその論点を集中させている。その典型として、梅本堯夫は『教育学辞典』（1978、第一法規）[6]で、「習慣」の特徴を次のように捉えている。すなわち、「習慣」は、①自動的・機械的・無意識的に遂行されるものでほとんど遂行の努力を要しないもの、②広い意味で刺激と反応間の連合であるとみなすことができ、何らかの動因がなければ遂行されないもの、③その行動形態の細部に至るまで忠実に同じように反復再現しようとする傾向があるので、状況に応じた適当な変化は極めて起こり難いもの、④一つの習慣が何らかの理由で遂行できないような状況が生じたときには、ただちに他の習慣が発動されてその代償手段となる。また、上位目標の手段としての習慣を遂行するために、さらに下位目標としての習慣が連結している。かくして多くの習慣は、個人内の一大階層構造を形成しているもの、であるとする[7]。

このような伝統的な理論においては、まさに習慣的な人間の反応＝行動は、精神的な機能や働きとはもともと関係のないもの、身体的な反応＝行動だけに見られるものとして理解されており、習慣的な働きに基づいた、人間の反応＝行動の意味を理解する働きとは全く切り離された、単なる身体の痙攣や反射的反応とみなす先入見で見られている。

このように、非常に幅広く通用している先入見に対して、習慣的な働きに基づいた人間の反

応＝行動が、一定の意味文脈に基づいて、出来事・事物の一定の意味に応じて、それに働きかけるものとして、人間の行動の中枢部分を構成しているものであるということを、経験的事実に基づいて改めて指摘し確認することは、極めて重要な意義を持っている。また、このことこそが、デューイが「習慣」論で追究した、最も基本的な課題であるとみなすことができる。

周知のように、デューイは、『人間性と行為』の叙述を、「習慣（的行動）」の記述――「第一部　行為における習慣の位置」――をもって始めている。『人間性と行為』は、勿論、「第二部　行為における衝動の位置」にも、また「第三部　行為における知性の位置」にも新たな、画期的な提案がなされ、特に「第一部　行為における習慣の位置」で提案されている「習慣」概念は、「習慣」をめぐる伝統的な先入見を根本的に変革するものである。

２．デューイ「習慣」概念考察についての先行研究

筆者は、これまで、デューイの「習慣」概念に論究している先行研究で、有力な示唆を与えるものを集めて参照してきたが、それらの中で、格別に示唆を受けたものとして次の三つを挙げる。

（１）V. ケステムバウムの先行研究

まず第一に、V. ケステムバウムの先行研究を挙げる[8]。ケステンバウムは、「本研究において、私は、存在論的現象学的な思索の方法に基づいて、デューイの習慣概念の意味内容を明らかにし展開することを試みた」ものであり、「デューイの習慣概念が、前客観的で生きられる意味の理論（a theory of pre-objective, lived meaning）である」ことを明らかにした、と述べている[9]。この現象学的意味において、ケステンバウムは、デューイの「習慣」概念の特徴を具体的に、次のように述べている。まず、①M. メルロー・ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）の「身体」や「習慣」の考え方との類似性に着目して論ずる。すなわち、この、メルロー・ポンティこそが、習慣的意味が帯びている「前客観的な志向性（the pre-objective intentionality）」を、発生的・存在論的現象学の根底を成すものとして、最も体系的に確立した人であり、その、彼（メルロー・ポンティ）が身体の志向性について語るときには、常に、習慣的身体に言及しており、彼にとっては、人の世界－内－存在（being-in-the-world）は、本来的に習慣的－世界－内－存在（habitual- being- in- the world）である、ということは明白なことである[10]、と指摘する。デューイと、このメルロー・ポンティとが哲学的思索において最も接近している点は、「習慣」とは、前客観的な志向性という人間の側の極（the human pole）を基礎づけている心身の構造（the organic structure）なのだ[11]、ということを共通して理解している点にあるとし、まさに、この意味で、メルロー・ポンティの「習慣的身体（the habitual body）」についての現象学的考察は、デューイの「習慣の前客観的志向性（the pre-objective intentionality of habit）」の概念の特質を検討する上で、格好の文脈を与えるものであると[12]、ケステンバウムは述べる。さらに、②まさにこの「習慣の前客観的な志向性」という用語を用いて、ケステンバウムは、デューイの「習慣」概念の特徴を次のように明らかにする。即ち、「習慣」は、デューイの定式化によれば、有機体によって認識的現象としては経験されないし、さらには意識的現象としてさえ経験されることはなく、反省や意識の明確な対象を熟慮しつつ「批判的に措定する（critical positing）」ような、どんな種類の操作にも先ん

じて既に存在している経験の水準で働いているものである。だから、「習慣」は、この意味において前客観的なもの、換言すれば知識や意識の対象を意図的に措定したり、明確に記述したりすることに先立って存在しているものであり、したがって、前反省的、前意識的経験の水準、すなわち人が世界に向かって近づき、世界を迎え入れる、そのもともとの仕方としての経験の水準においては、「人は意味を付与する存在（a sense-giving being）」であって、この人の「意味を付与する」働きをなしているのが、まさに「習慣（的行動様式）」である[13]、とする。そして、③「習慣（的行動様式）」とは、まさしく、デューイが「受容された意味（accepted meanings）」、「蓄えられた意味（funded meanings）」、「習得された意味（acquired meanings）」、「心身の器官となるに至った意味（organic meanings）」というように、多様に呼んでいるところのものである[14]、とする。また、上で述べたような、④このような「習慣－意味（habit-meanings）」、または習慣的意味は、意識的行動を動機づけるものであるが、それのみならず、それは「心身の統合の基礎（the basis of the unity of the organism）」をも成している[15]ものであり、さらに一層根本的に考えるならば、デューイが言うように、「習慣」こそが「自己を構成している（constitute the self）」ものであるから、自己と世界とのかの志向的な相互関係それ自体も、「習慣」に根ざしていると考えられ[16]、「習慣」は個人の経験の諸結果を反映して記録するが、それはまた、勿論のこととされた意味の形をとって、彼の将来の経験のよりどころとなると結論付ける。

以上のように、ケステムバウムの「習慣」概念の捉え方は、従来からの「習慣」概念とは、大きく異なり、まさに斬新で画期的で有意義なものである。しかし、筆者が今後明らかにしようとしている、習慣的行動と「精神的、道徳的な行為」との関連の問題、さらに習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連の問題については、論究されていない。そもそも、ケステンバウムの問題関心は、「習慣の前客観的な志向性」の観点からデューイの『経験としての芸術（ARTS AS EXPERIENCE）』の論旨を一貫して解釈し、解明することへと向かっている。このことから、デューイの「習慣」概念を、後述の①習慣的行動と「意志」との関連、②習慣的行動と「精神的・道徳的行為」との関連、③習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連の三点から統合的に捉えようとする筆者からすれば、満足できるものではない。

（2）谷口忠顕の先行研究

第二に、谷口忠顕の先行研究を挙げる[17]。谷口は、その『デューイの習慣論』の「第一章　経験の統一性と習慣の新概念」:「第二節＜習慣原理＞の一般的特徴」において、主として、デューイの「習慣」の考え方に見られる特徴を指摘し解説している。すなわち、デューイの「習慣」概念の分析の際立った特徴は、彼の社会心理学的分析の鋭さにあり、その自然的生命観を基礎とした、論理学をはじめ専門諸科学との統合的なアプローチの方法と態度を持つ点にあるとする[18]。そして、デューイは、「習慣」概念に関する経験主義的分析の仕方を、「生長の連続性」または、「経験の不断の更新的連続性」を考察の出発点として、「経験の道徳的統一性と美的統一性」を実現する価値判断を営む主体としての、「習慣の束としての自己」、さらには、「習慣」の「中核的機能を掌る＜性向（disposition）＞ないし＜準備傾向（predisposition）＞」の中に育まれた「情動的感得力（emotional sensitivity）」に求め、この情動的感得力が、「思考と行為の統一的サイクルにおいて、習慣の更新的連続性を導くものである」と説明する[19]。

そして、谷口は、「確かにある一定の行動様式の繰り返しは習慣の特徴を表す一面であろう」が、ただ単に、受動的な反復の概念でもって理解したり、「諸行為に発現された機械的反復とか、諸行為を誘発させる牽引力を持つものとして、これを捉えよう」としたりするのでは、「習慣の本質を統合的に洞察」することにはならないとし[20]、そうではなくて、「＜知覚（perception）＞と＜思考（though）＞と＜行動（action）＞との統合的働きが習慣の連続性のダイナミックな展開となって運動する[21]」ものとして捉えるべきであるとデューイは強調している、と述べる。そこで、谷口は、デューイが最も力説したかった「習慣」の特質は、「習慣」の中核的機能を成す＜性向＞ないし＜準備傾向＞の働きにあり、「この＜性向＞ないし＜準備傾向＞が形成されるのは、本源的生命力としての＜衝動＞ないし＜本能＞が状況の含む諸条件を契機として、具体的行為となって調整され、発現される過程においてである[22]。」とする。そして、この＜性向＞ないし＜準備傾向＞は、潜在性、力動性、主観的傾性、統合性等の特質を持ち、これらの特質を帯びた＜性向＞ないし＜準備傾向＞が、「その対象を外に或る程度明白に意識化すると、それは実質的内容を持った対象となる。これがインタレストであ[23]」り、そのインタレストが、さらにその対象を明白に意識するようになると、それは、「欲求」や「目的」となり、具体的諸行為の形態をとることになる[24]。行為は、その「一つ一つがバラバラに発現しているのではなく、性向や人柄や人格の顕れであり、その永続性と独自性の発現」なのである[25]。このように、全ての行為は、その一つ一つが人柄の表現だと判断されなければならないほど、行動の習慣的様式として、がっちりと結びあっている、とデューイの「習慣」概念の特性を述べている。谷口は、前出のケステムバウムがその著書で、「デューイの哲学的思索において習慣的なものが担っている役割は、彼の崇拝者によっても彼をけなす人々によっても、十分な注意が払われて来なかった」[26] と述べていることからしても、谷口が人間行動の根本を成す習慣的行動の持つ意義を明らかにしようとしたわが国最初の探究者であり、その意味で大きな業績を打ち立てた研究者である。しかし、谷口の問題関心は、彼が展開する生長の理論の根底を成すものとして習慣的行動に着目するものであり、筆者が今後、特に明らかにしていこうとする後述の三つ目の習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連の問題については触れているが、一つ目の習慣的行動と「意味」との関連の問題、さらには二つ目の習慣的行動と「精神的、道徳的な行為」との関連の問題については触れていない。筆者が今後解明しようとする、「習慣」概念の特徴は、それら三点を明らかにして初めて正しく捉えたことになるという立場からすれば、不満の残るものである。

（3）杵淵俊夫の先行研究

第三に、杵淵俊夫の先行研究を挙げる[27]。この研究は、本論文後述の、デューイの「習慣」概念の一つ目の特徴として挙げた、習慣的行動と「意味」との関連、すなわち習慣的行動と意味文脈との本質的な結びつきをテーマとしている。そして、何よりもこの研究の意義は、『人間性と行為』では、「習慣＜的行動＞がある意味文脈を背景として、意味を帯びて為されているような種類の出来事なのか、そうではなくて、意味の働きとは全く無縁な、機械的に反復される、単なる肉体の自動運動にすぎないものなのか、デューイの見解が一体そのどちらに傾いているのか」ということを確かめようとしたことにある。その結論として、この著作では、①結局のところ、ある意味文脈に前意識的に導かれた習慣＜的行動＞とか、ある意味文脈を背景として暗黙裡に担って為されている習慣＜的行動＞とかという、習慣＜的行動＞の概念は、未

確立のままで終わっていると判断し、②習慣＜的行動＞の硬直化、硬直化した習慣＜的行動＞を強調して、習慣＜的行動＞のメカニズムから注目の視線を逸らして、③硬直・硬化した習慣＜的行動＞と知的な活動との間の対比を際立たせ、④衝動＜的行動＞の概念を導入し、それを媒介とすることによって、習慣＜的行動＞のメカニズムとは、異質で、異次元の働きとしての知性の働き、知的思考または熟慮の過程の叙述へと飛躍している、と結論付けている。これらの指摘は、とりもなおさず、われわれが、今後デューイの「習慣」論（概念）を明らかにしていく上で極めて興味ある問題提示となる。即ち、その第１は、デューイの新しい「習慣」概念の意味を明らかにすること、第２は、行動主体＝反省的活動主体が新たな習慣的行動様式を獲得する場合、習慣的行動それ自体のメカニズムを働かせて、当の習慣的行動の意味体系の再構成を目指して、それについての反省的探究に着手するに至る過程を具体的に辿って叙述すること、である。これらの杵淵の指摘は、今後デューイの「習慣」論を考察していく上で、われわれに新たな研究の方向性を与えるものとして画期的であると同時に、きわめて大きい意義を持つ。しかし、杵淵の研究は、本研究で今後明らかにしていこうとする習慣的行動の根本的特徴については具体的には触れてはいない。

以上のことから、デューイの「習慣」概念を正しく理解するためには、①習慣的行動と「意志」との関連の問題、②習慣的行動と「精神的・道徳的行為」との関連の問題、③習慣的行動と「知的で独創的・創造的な行動様式」との関連の問題を包括的に捉えて初めて理解したことになるという筆者の立場からすれば、前出の三つの研究は、完全に満足できるものではない。このことから、デューイにおける「習慣」概念の特徴を明らかにする研究は、筆者に委ねられたものであると理解する。

３.「習慣」概念考察の諸過程

さて、われわれが、デューイの「習慣」概念の根本的な特徴を指摘する際、デューイが経験的事実に基づいて辿る「習慣」に関する議論の各段階に注目し、習慣的行動の意味内容を明らかにすることは極めて重要なことである。

ところで、デューイは、『人間性と行為』「第一部　行為における習慣の位置」で、「習慣（的行動）」、というよりは、人間行動を、「性格」または「自我」と環境の諸条件との間の相互作用の結果としてとらえている。次の、デューイの文章は、このことを如実に示している。すなわち、

> **「正直、清純、悪意、苛々、勇気、平凡、勤勉、無責任などは、一人間の私有物ではない。それらは、個人の能力が環境の諸力との間に営む作用的な適応の結果である。全ての徳や悪は、客観的な力を編みこむ習慣に他ならない。それら徳や悪は、個人を組み立てているものによって与えられる諸要素と、外界によって提供される諸要素との相互作用に他ならない。**[28]」

そこで、ここでの「習慣」論（概念）の議論の進め方を簡潔に概観＝展望すると、デューイにおける「習慣（的行動）」の諸過程を辿る考察は、次の三段階に分かれる[29]。

（1）習慣的行動の考察の第一段階

デューイは、「習慣は、器官作用と同じくらい確かな言い分を持つ環境を使い環境を自分の中に組み入れる道である[30]」ということを、われわれが、先ず認めることから始めなくてはならないと主張する。

そこで、考察の第一段階において、習慣的行動が、環境の諸条件と結合し、それを自らのうちに統合しているものであって、客観的な性格をもつものである、ということを明らかにすることから始める。そうした彼の主張を裏付けるものとして、次の三通りの仕方で、経験的事実を指摘する。すなわち、行動様式としての「習慣」は、①活動・行為の仕方――歩く、話す、正直――として、生理学的機能――呼吸、消化、歩行などと同様に、有機体と環境との「協同（cooperation）」を要求するものである。「習慣」は、「技術（arts）」と同様に、「感覚器官や運動器官（sensory and motor organs）」を含んでいるとともに、客観的素材を含み、客観的な諸々のエネルギーを同化し、環境の支配をもって終わる[31]性格のものである。また、②人の行為は、常に、一定の社会的状況にあっては、周囲の人々の反作用――是認、非難、抗議、激励、分担、妨害――を考慮しつつ為されるものであって、行為と、その「習慣」は、「社会的な（social）」ものである[32]。さらに、③「文明」と「未開」とを比較することによって、文明人の活動とその「習慣」は、快適な「あらかじめ準備された環境（antecedently prepared environment）」すなわち、平坦な道路、信号機と交差点、運輸当局と快適迅速な輸送など、巨大な施設・設備、大規模な諸制度、複雑な規則等を必要とし[33]、まさに、こうしたものが予め環境として確立されていなければ、文明人の生活や活動は成り立たない。こうした文明の機構は、行為と習慣的な行動が環境の諸条件に依存するとともに、それに働きかけて決定的な仕方で作り変えるということを示している。

（2）習慣的行動の考察の第二段階

習慣的行動に関する考察の第二段階は、行動様式としての「習慣」と、意思または自我や性格との密接な相互作用の関係を事実に基づいて明らかにすることである。

まず、①習慣的行動は、「投射や推進の力（projectile, propulsive power）」を持ち、自我や意思に対して、一定種類の活動を要求するものであり、われわれの有効な欲望を形成するとともに、それを達成するための「実行能力（working capacities）」を与えるものであり、自我や意思と相互作用しながら、それらの中に入り込んで、それらの部分となり、それらを構成する[34]ものである。したがって、「われわれは、習慣そのものなのである（we are the habit）」ということが指摘される[35]。そして、②このような習慣的行動の特徴を裏付けるものとして、経験的に見て一般的な、次のような事実が例示されて分析される。すなわち、「習慣」は、「歩行」、「楽器の演奏」、「タイプを打つこと」など、単なる「受け身の道具（passive tools）」や「技術的な能力（technical abilities）」ではなくて、意思の直接の命令からは、明らかに独立した、一個のメカニズムである、ということ。さらに、いつも悪い姿勢の男が、自らそう決意するか、あるいは他人から「そうせよ」と命じられさえすれば、それだけで「姿勢をよくする」ことができるか、という問題[36]。これは、「魔術 magic」の信仰に走るのでなければ、明らかに否である。また、③さらに明白な場合として、人格そのものに関わる「悪癖（bad habits）」がある。「賭博、酒・麻薬への耽溺」等の悪癖は、われわれに、「恥ずかしいと思っていること」、「為すべきではないと自身に言い聞かせていること」をわれわれに行わせ、自らの「公式的決心や意

識的決定（formal resolutions, our conscious decisions）」を踏みにじらせてしまう[37]。

（3）習慣的行動の考察の第三段階

さて、習慣的行動は、「目覚めている四六時中作用している（operates all the time of waking life）[38]」が、ある具体的な行動において直接的に支配的であるようには見えない場合でも、それは働きを止めたわけではなく、無数の形成された習慣的行動がその中に働きを及ぼしている。したがって、第三段階として、デューイは次のような事実――即ち、①「人の静止している場所からの距離や方向の認識」は「見る者の中に、歩くという習慣が表現されている」場合。次に、②「夢の中にさえも」現れて、われわれの活動や動作を支配する場合。そして、③人が目つきや、ある表情や身振りの中にうっかりその正体を表してしまったり、また個々の行為を通して性格が読み取られたりする場合等――を指摘することによって[39]、「あらゆる行為における、全ての「習慣」の連続的作用（the continued operation of all habits in every act）」と、それら習慣的行動の「相互浸透（interpenetration）」の事実、および、こうした「習慣の相互浸透の一体系」として「性格（character）」を捉える。

最後に、これまでの、三段階の考察からまとめると、習慣的行動を次のように定義づけることができる。すなわち、習慣的行動は、

> **「以前の活動力によって影響を受け、その意味で獲得されたものである。しかも、自らの中に、行動が持つ群小諸要素の何らかの整頓作用なり、組織化なりを含んでいるもので、性質上客観的、動的であり顕在的な仕方で外へ現れ出ようと準備しているもので、明らかに支配しつつある活動力でない場合にも、何らかの抑圧された従属的な形をとって、常時機能しているものである。[40]」**

以上のように、『人間性と行為』における、このような習慣的行動の考察を辿ってみると、デューイが、伝統的な「習慣」概念に全くとらわれることなく、われわれの、日常普段の生活＝行動における経験的事実に基づいて、画期的に新たな「習慣」概念を提案しており、それに基づいて、われわれ精神的存在の行動の、全く新たな在り方も提案している、ということが明らかになってくる。通常、われわれは、主として、習慣的に組織された様式の行動の諸過程を辿っているのであって、習慣的に行動することによって、われわれは、環境の諸条件との相互作用を現実に、しかも確実に成り立たせることができるし、また同時に、われわれ自らの生活＝行動の諸過程に、意味文脈的に一貫性と継続性をもって行動することができる、ということである。

4．結論

これまで指摘したような認識に基づいて考えると『人間性と行為』における、デューイの「習慣（的行動）」概念の、注目すべき特徴は、特に次の三点に集約される。

○習慣的行動は、「意味を所有し意味に反応する」ような水準ないし種類の行動様式である。

デューイによれば、われわれが習慣的に行動している時、われわれは、一定の意味文脈＝状

況の判断を前提とし、一定の意味文脈＝状況を辿って行動しており、その（意味文脈＝状況の）構成諸要素としての個々の出来事・事物に、そのそれぞれの意味に応じて反応し、個々の出来事・事物を、それぞれの意味に応じて取り扱っている。つまり、習慣的様式としての行動は、「意味を所有し、意味に反応する」ような水準ないし種類の行動様式である。

○習慣的行動は、動作水準の行動のみならず、「精神的・道徳的な行為」をも構成して成り立たせている。

デューイによれば、習慣的様式の行動は、一定の刺激状況のもとで、特定の反応が一定のシグナルによって誘発される、反射的・機械的でかつ無意味な、単なる動作水準での行動ではなくて、もちろん動作的な水準の行動つまり身体運動も含むが、「精神的・道徳的な行為」をも構成し成り立たせているものである。

○習慣的行動は、その行動の多様な組み合わせと柔軟な統合の結果として、「知的で独創的・創造的な行動様式」を成り立たせている。

デューイによれば、われわれ、精神的存在としての行動当事者は、日常普段の生活＝行動の過程で、多種多様な習慣的な行動様式を相互に働きかけ合わせることによって、習慣的行動様式を「相互に浸透し合わせ」、「相互に修正し合わせ」て、習慣的様式の行動の一定の体系を構成し、そうした習慣的行動様式の多様な組み合わせと柔軟な統合の結果として、「知的で独創的・創造的な行動諸過程」を成り立たせている。

これらの「習慣」概念の特徴についての具体的考察は、これまでのデューイ研究において十分取り扱ってこなかった問題であって、これ等の問題点を突き詰めて考えてみることは、デューイの人間観を全体として展望しつつ、人間行動の成り立ち方の分析的研究をさらに深めて行く上で、明らかに意味のあることである。本研究は、今後、デューイの「習慣」概念が新たに提案するに至った、これらの問題について、可能な限り具体的に『人間性と行為』の叙述＝文面を辿りながら、その意味内容を一つ一つ明らかにしていく上での重要な基礎的研究である。

註

（1）拙稿「誕生時における＜未成熟＞の意味－デューイにおける＜成長＞の基本的前提条件－」『日本デューイ学会紀要』 第30号、1989年、1～6頁。
（2）拙稿「デューイにおける＜習慣＞概念の意味とその構成方法」『日本デューイ学会紀要』第31号、1990年、21～26頁。
（3）拙稿「デューイにおける哲学的思索の出発点としての＜習慣＞について」『日本デューイ学会紀要』第32号、1991年、19～24頁。
（4）拙稿「習慣的行動の再構成のメカニズム」『日本デューイ学会紀要』第35号、1994年、44～49頁。
（5）谷口忠顕（『デューイの習慣論』九州大学出版会、1985年、12～14頁）も習慣概念に触れた伝統的諸哲学者の考え方を批判している。
（6）梅本堯夫『教育学辞典』第一法規、昭和53年、299～300頁。
（7）梅本堯夫（1978、前掲）は、さらに【習慣形成における教育的問題】の項目で、学習における反復の程度に応じて自動的に迅速に行動が遂行されるような習慣が形成されることから、算数の九九や公式など、基礎的な技能は反復学習した方が望ましい習慣が形成されるとしている。しかし、これは、例えば、かけ算九九を例にとってみても、児童に、かけ算を理解・定着させるために、その意味指導が特に大切であるに

もかかわらず、計算方法が分り後は暗記すればよいとする、従来の計算至上主義の考え方そのものである。算数教育の最重点目標は、『算数教育指導用語辞典』（2012、教育出版）によれば、「問題解決を通して新しい知識・技能や数学的な考え方を獲得させることにより、その新しい知識をよりよく理解させ、その知識などが必要なとき、いつでも適切に使えるようにすることである。」そして、「問題解決の過程で児童に、新しい知識などを適切に組み入れるように既存の自己の知識体系を組み替える」力を育成することにある、としている。このことは、算数指導では、単なる反復学習に重点を置くのではなく、意味を理解し定着させるための意味のつながりのある指導が大切であることを説いたものである。

（８）Victor Kestenbaum, *THE PHENOMENOLOGICAL SENSE OF JOHN DEWEY: HABIT AND MEANIMG,* Humanities, Press, 1977.

（９）*ibid*., PREFACE. ibid., p.7.

（10）*ibid*., p.7.

（11）*ibid*., p.7.

（12）*ibid*., p.9.

（13）*ibid*., p.4.

（14）*ibid*., p.3.

（15）*ibid*., p.3.

（16）*ibid*., p.3.

（17）谷口忠顕『デューイの習慣論』九州大学出版会、1985 年。

（18）*ibid*., p.18.

（19）*ibid*., pp.6-8.

（20）*ibid*., p.12.

（21）*ibid*., p.16.

（22）*ibid*., p.59.

（23）*ibid*., p.63.

（24）*ibid*., p.72.

（25）*ibid*., p.74.

（26）*ibid*., p.7.

（27）杵淵俊夫『日本デューイ学会紀要』第 45 号、2004 年、106 ～ 113 頁。

（28）John Dewey, *HUMAN NATURE AND CONDUCT*, Modern Library ed, 1922, p.19.（以下、邦訳は、東宮隆訳『人間性と行為』春秋社、1971 年を参照）

（29）習慣概念考察の諸過程の各段階は、拙稿「デューイにおける＜習慣＞概念の意味とその構成方法」『日本デューイ学会紀要』第 31 号、1990 年、21 ～ 26 頁で取り上げ論じているが、本稿でも「４＜習慣＞概念の特徴」の考察を引き出すための基底を成すものとして改めて考察を加えた。

（30）John Dewey, *HUMAN NATURE AND CONDUCT*, Modern Library ed, p.18.

（31）*ibid*., p.18.

（32）*ibid*., p.19.

（33）*ibid*., p.22.

（34）*ibid*., p.25.

（35）*ibid*., p.25.

（36）*ibid*., pp.28-29.

（37）*ibid*., p.25.

（38）*ibid*., p.36.

（39）*ibid*., pp.36-37.

（40）*ibid*., p.39.